

(14) 拙著『旧約聖書の生い立ちと成立』一〇九—一一一ページ(いのちのことば社)。

(15) 『改革派神学』第八輯収録の拙論「洪水前族長の長寿について」九五—九七頁参照(一九六六年)。

(16) 拙著『創造と墮落』七一ページ注七(みくに書店)。

(17) 日本基督教改革派教会東部中会機関誌『まじわり』誌九巻四号(一九七三年六月)収録の拙論「旧約聖書神学序説四」一九ページ参照。

(日本福音主義神学会理事長)
(東京恩寵教会牧師)

モーセ五書の構造が示唆する

「和解論」と「創造論」の位置づけ

—組織神学における創世記一—三章—

小林 和夫

はじめに

論者への課題は「組織神学における創世記一章より三章まで」というものであった。そこで単純に直観的に得られる洞察は、すくすのテクニストと教義学における「創造論」「人間論」

リッチェルによる倫理的世界観の限界の中での創造の論述であるということが出来る。

こうした近代神学の経過の中で徐々にたとえばトレルチのよう「創造論」が単に世界の始元や人間の起源を問うことに主眼をおくのではなく、現に存在する世界は永遠的創造者によるのだというキリスト教信仰に從属するものとしての位置におさまり始めてきたことも神学思想史の伝える所である。確かにこの考え方の中には創造を単に客観的事象的視角より捉えようとするのではなく、そこに浸透している救拯論的意義を見出そうとする正しい意図が伏在していることは承認しなければならぬことである。しかし同時にすべてのキリスト教における教説や思想がキリスト信仰そのものを基礎とする当然の理由から、「創造論」は「キリスト論」乃至は「和解論」の単なる背景又は予想と考えることは不当である。

今日一般に保守陣営においては「創造論」が「有神論」や「摂理論」的な立場から見らるべきであるという「創造論」それ自体に独立的な位置を認めて、そこに固有な意味を見出そうとする考え方も、近代神学との対話を考慮しつつ「創造論」に固有の立場を認めつつもそれが独自に存立するものとしてでなく、「和解論」「キリスト論」との根源的連続関係をもつものとしての考え方がありたいよう。しかし両者は厳密に全然異なつた立場とは言い切れない面も持っていると言わねばならぬ。「有神論」「摂理論」自体が「和解論」「キリスト論」の関

「罪悪論」「和解論」といったような各主題との関係であろう。これらの議論は多くの場合によく見るものの出来るものなので、論者は最近の組織神学において問われている「創造論」の位置の妥当性に、「和解論」の優位性の問題に所与のテクニスト、それもそれ自体単独で存立するその属する体系より分離されたものとしてではなく、創世記全体ひいてはモーセ五書全体の構造の中におけるテクニストよりの光を当ててみる事とする。

I 教義学における

「和解論」と「創造論」の位置関係

バルトの「教会教義学」の築構以来「和解論」の優位性が非常に高く評価され、一部からはそれは不当な強調であつて、特に「創造論」などは不均等な位置を与えられているという批判がでてくることは周知のことである。

一般的には教義学における「創造論」は「三位一体論」のあとに続くのが普通であつた。近代に至って旧約聖書の創造の記述が自然科学との対比において余りにもかけ離れてはいないかという危惧や、一方における聖書の批判的歴史的研究よりの発言として天地の創造は、古代中近東社会の神話のレベルに属するといったような判断が少なくとも古典的な順序に変化を与え「創造論」の論述にいろいろの工夫をもちたことは確かである。それらの頭れがシュライエルマツヘルの宗教的自意識という観点からとりあげられた「世界と神との関係」の表出や、

連なしにはキリスト教的論理としてはほど遠いものになつてしまふからである。

さて、これらの状態を念頭におきながら、テクニストの中から特に教義学的主題に足場を与える箇所いくつかを、とりあげてみる事とする。

II 両者の関係に光を与える聖書解釈

正しい意味の聖書解釈においては、テクニストの自己主張に対して耳を傾けることが、その基本的な原則とされるわけであるが、このテクニストをして語らしめるということは黙ってキリストの前にあれば良いというのではない。自己の主観的主張や先入観の働きが最大限に停止されて、即物的にそれに面前しようとするあらゆる学的操作が必要とされて来る。これは所謂歴史批判的研究と呼ばれる領域であるが、そこで得られたものが読者のものになるためには少くとも、それと読者との対話的關係がなければならぬ。コリングウッドがいうように真の解釈は過去と現在との絶え間ない対話の上に成り立つからである。

そしてそのテクニストとの対話の關係は対論、対決にまで押し進められてそこで初めて読者が著者の過去と読者の現在とが一つになり、テクニストの真の意味の充実がなされるのである。当然これは聖書解釈のプロセスを理論的に整理すれば、のことである。経験的には、各種の実践の仕方があるであろうし、そこ

に真の聖書の著者である聖霊の正しい照明の導きがある事が大きな前提となっていることは言をまたないことである。この意味においてはバルトのいう「注釈とは常に取る」という言葉と、読みとることと、読み込むことの結合である^⑤という言葉は至言である。というのは、テキストとの対話、とか対論とかは具体的には、とることと、やることであるからである。もし聖書の自己主張に聞くと言ふことが、とることだけを期待しようとする受動的なものに終始するなら、読者の現在とは断絶したものであるであろうし、やることだけに集中すれば、それはテキストの持つ情況という歴史性が無視された主観的な読み方に終ってしまうであろう。

さて、そのテキストの歴史性を問いつつ、現在において何が語られるかをテキストとの対話対論に待った正統主義的解釈者たちが創世記の一章より三章に出て来る教義学的に重要な示唆を与えるいくつかの部分をも具体的に見る事とする。そこで彼らの解釈において、テキストとの対話を可能にした、一貫した何かを得る事が出来るとすれば、それは一体何であろうか。

A 「神の像」に関するカルヴァンの見解

周知のようにこの「神の像」に関する解釈は非常に多岐にわたっており、その多くが教義学のフィールドよりの発言であることは興味深いことである。宗教改革者たちの中でもルターは、それ迄のあらゆる合理的解釈をしりぞけて、墮罪によって

一方が他方に応答し、服従する。この像関係に特有な秩序をカルヴァンは方正さ(rectitude)と呼ぶ。一般的意味において、方正さ、とは神に対する絶えざる依存であり、世界が造られた恵みの秩序、創造の秩序のことである^⑥と説明している。それゆえカルヴァンの言う神の像は本質的にイエス・キリストにおいて再生した人間のみがそれを理解するのである。人間が本来の意味の神認識において真の人間存在となって始めて自己自身を知るのだから、キリストにあって神と面会する再生した人間となつてのみ、人は人間が神の像に造られたという事実の意味を知るのである。トールランスはカルヴァンのこうした主張を次のように要約する「私達がキリストを本体においても現実においても明らかな神の像であり給うと理解する時にこそ、人間はキリストに一致してかの像を反映すべきことを知るのである。従つて人間は神の像においてあるとは言え神に関する一つの像であるに過ぎない、カルヴァンの神学において人間観を展開するものはこの光の中で解釈された神の像である」^⑦。

ここでは明らかに創造における人間の神の像がキリスト論的な光で見直されているのであって、それはまた同時に人間の回復と救済の開始という観点から見られるのと同じであるから、和解論的な光から創造の事実が見直されていると言わなければならない。このことは以下の二三の問題においても共通して問われるのであるが、和解論と創造論の両者の位置づけに一つの光を投げているのであるということが出来る。

人間にある「神の像」は完全に破壊されたので、人はその神の像について完全に理解することは出来ないし、それについて発言することが出来ない状態になっていると主張している^⑧。このように彼においては、それが消極的にやや悲観的に受けとられているのであるが、それは彼の見た罪の事実がテキストとの対話において、何かをテキストからとることをさえ断念させるほどのものであり、彼がテキストに投げかけた墮落の恐ろしさは、その対話をそれ以上展開させなかつたものと見ることが出来るよう。

その点において、カルヴァンはより教義学的視野をもつていたものと考へる事が出来る。彼は聖書解釈者としてここを捉えるだけでなく、この神の像についての教説の中で、神との関係における人間の被造物性についての教理を述べている。用語の上では創一の26の「像」(image)と「似姿」(likeness)とを区別していないが大きく分けて「神の像」は次の二つの意味において用いられる。その一つは受肉した言葉としてのイエス・キリストにおいてのみ、真の神の像を見ることが出来るとするそれであり、もう一つは、愛と信仰とをもつて、人間を神の子として恵みによって抱容し給う神の問いかけに応答する時にこそ、人間は神の像を身を帯びるのであるとするそれである。この人間と神との像関係の対応として彼はアダムとイブの関係を引用する。トールランスはこれに関して「この関係においてアダムとイブには相互扶助の社会をなし、公正な釣合いを保ち、

B プロトエバンゲリウム解釈

「蛇のすえと女のすえ」(創三の15)との斗争を通じて女のすえが蛇のすえに勝つと言ふ約束は古代教会以来「原福音」(Protevangelium)と呼ばれ、この女のすえはメシヤの預言と見られてきた。これを直接的歴史的にそのまま読む時にメシヤの預言として受けとることは不可能であろう。ケヴァンは一般的にこの象徴は自然の世界を連想させるものであるとさえ指摘して、「へびは人間のかかとをかんで人間を殺すが人間はへびの頭をうち砕いて殺す」そのことがまづ自然界における普通のことであると^⑨する。この象徴が古代教会においてメシヤの預言として受けとられたのは、言うまでもなく、イエス・キリストの十字架において救の御業を見た彼らがその観点からの光をあてて受け取ったからである。

その角度からこのテキストは詳細に読まれて、へびに征服されたのが人間であつたように勝利をもたらすのも人間であるとされる。まづ集合的な意味でサタンを打つのは人類であり、次にテキストは集合体より個人へと移行して、「へびのすえ」から「へび」に、また「女のすえ」が単数であることに注目させる。すなわち「女のすえ」として生れた(ガラテヤ四の4)キリストによつてのみこの勝利は実現成就するもの(イヨハネ三の8)とされたのである。

渡辺善太氏はこのテキストをそのあとの「皮衣」(三の21)の事件と結び合せて「墮落せる人間のために皮衣が与えられるた

めには、獣が犠牲とせられなければならないはずである。人間が動物を食することを許されたのは洪水後のことであつたから(九の3)、この時にはいまだ動物を殺すということはなかつた。したがつて樂園において墮落した人間のために、そこでその生を楽しんでいた獣がほふられたわけである。これによつてたとい墮落したとはいえ、その造り給ひし人間に対する神の顧慮がうかがわれなければならない^⑩として、聖書全巻を貫く主題中の主題となつている「救拯」の元始を、神の「恩寵の性格」の開示として扱っている。

これらの見方においては創造における人類の墮罪も、墮罪そのものとして単なる客観的情報として受けとられないで、イエス・キリストによる和解の光より解釈されて、テキストの言おうとする真意が発掘されているのである。

C 子型論的解釈の妥当性

創世記1-3章のテキストの中の一つで新約聖書に重要な問題を投げかけているのはアダムの墮落とそれを第二のアダムのと関係においたパウロのアダムキリスト論解釈である。新約聖書が受容しているこの解釈を妥当なものとしている理由は何なのであるか。子型論的解釈はすでに教父時代に盛に用いられてその時代の神学構成の基盤的なものとさえなつており、さらには中世、宗教改革時代より近代に至るまで聖書解釈の魅力的なものの一つとして継承されて来た。しかし近代の理性主義の

産み出した歴史的批評的聖書学の開始とともにこの解釈は嘲笑的に扱われるほど軽視されてしまった。その主な理由はこの解釈が出来事の歴史をとり越えた非歴史化を行つてしまふという点にあつたのである。ところが今日に至つて聖書神学と教義学との関連性の重視などからもう一度この解釈の神学的意義が論ぜられるようになった。渡辺善太氏はその具体的な理由を次の四つに見ている。「その一つは新約聖書の客観的研究の進展で、新約聖書中に、事実としてこの解釈が用いられているというこの確認であり、その第二は、旧約聖書それ自身の中に、すでにこの解釈が存在しているというこの発見であり、その三は、キリスト教の旧約解釈はキリスト的でなければならぬとする要請(ブルトマン、フォンラート、ヒルシニ、バウムゲルテル)であり、その四はルター及びカルヴァン研究が新しく行われるようになった結果、彼らがこれを用いているということの再発見である^⑪。そして渡辺氏は特に今日においてはこの点に関してフォンラートの発言が重要であると指摘して「旧約聖書における子型のこの再認識は、……キリストにおいて自現なし給ひし神が、また旧約の契約の民の歴史においても、その痕跡を彫りつけ給うたという信仰である」と引用し、フォンラートがこの解釈は解釈学的に規定され得ないので、その結果を教義学的基準としてはならないこと、およびこの解釈は聖霊の自由において起るべきものであると警告していることを掲げている^⑫。

ここでアダムキリスト論の現代的学究の有様に触れることは

III モーセ五書の成立と創世記一章より三章の関係

A 一つのまとまりとしての五書の叙述構成

創世記1-3章の解釈において、この部分は人間が存在する以前の歴史と少くともアダム以外の人が存在していなかつたので、四章以下に始る人類の歴史とは一応区別されて単独で解釈を求められるのが普通であつて、人の存在しなかつた時の歴史理解は如何にしてなされたかなどが問われるところである。

C・ヴェスターマンはこの点に関して、「創造についての伝統的な考えは大きく訂正する必要がある。教会の伝統においては、また教会の説教においては、聖書冒頭の三章は孤立させられてゐる。それらがより大きい関連の中に立つていて、その関連から理解されねばならぬということは見られていない……」^⑬と指摘している。しかしさらに大きく言えばこの部分は、創世記にとつて根源的であるばかりでなく、モーセの五書の成立と構造の中において(ひいてはそれが聖書全体にとつてそうなつてゆくのであるが)その出発となつてゐる部分である。

周知のように文書的に言えばモーセ五書は、出エジプト記、レビ記、民数記が「そして……」という接続詞で、申命記が「……これらの事」という語で始るところから、これらの各書は互に独立して存在するのではなく一つのグループを本来的に形成しているものと受けとられて来た。

そのような文書的な表現からのみでなく、神学的思想から言

さけるが、バルトがこの両者の対応関係を掘り下げて「型と対型」の本来の意義を転倒して位置づけしていることは注目に値する。すなわち、彼は対型としてのキリストを原型とし「それ故、アダムはキリストの光においてのみ解釈せられうるのである。アベコベではない」と子型論的解釈の正しい一つの方向を指示している。以上のように現代この解釈の意義を再発見して評価するものたちは、表現こそ異つてゐるが基本的には、その成立の理由をキリスト論的、和解論的の光より見直された歴史観をその根底に有しているのであるという事が出来る。

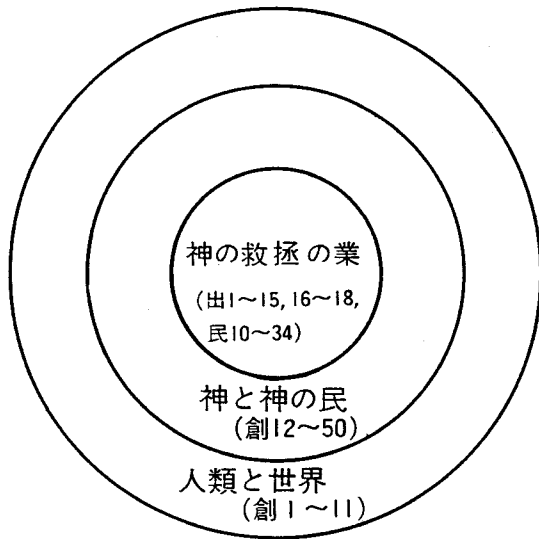
さて、このキリスト論的、和解論的な光より見直すということは、解釈される事象の固有性を失ひはしないかという危惧を一応予測させるのではあるが、啓示としての機能を負わしめられてゐるそれらは、その原啓示としてのキリストの光なしにはかえつてそれらのもつ、固有な意義も失われてしまふというべきである。この事はたとえそれが宗教改革者たちであれ正統主義的神学者であれ、ある特定の学者たちがそのように見たからということに根源を発していないということである。聖書それ自身が成立の始めから、それ自身の中に巻き込んでゐる一つの大きな前提であり、それこそが聖書をして「キリスト証言」の機能を果させてゐるものなのである。その実例をモーセ五書の中より次のような形で考察してみよう。

つても、五書が神による人類救済の歴史の原型としての主張をもっていることも伝統的に承認されて来ている。すなわち、それは原始史という固有の歴史からイスラエル選民の起源の歴史の史的叙述でありながら、それ自体がこの世の一般歴史を越えたもう一つの歴史を指示しているということである。それはイエス・キリストによって現実する救済史への証言である。その内容は、墮落（創世記）した人間が救出（出エジプト記）され、正しく神を礼拝し（レビ記）人生の旅路（民数記）を目的地（申命記）に向って備えつつ歩むことである。その原型的表出が五書の構造そのものを支える主張である。

B 構成された作品の表現としての順序と著者にとっての中心的出来事

歴史的時間の順序から五書を見ると、創造があつて墮落があり、父祖時代を経て出エジプト、荒野の放浪よりカナンへと記事は連続してゆく。構成された作品の表現としての順序はこの通りであるが、この作品の著者にとって中心的な出来事、しかも、こうした歴史の流れが叙述される意図をさえ可能にするその出来事は何であつたのであろうか。モーセ五書はそうした中心的出来事にいたる神の導きの始めからの叙述が要請され、さらにその出来事がそれ以後の歴史としての将来をどのように展開していったか、という史観が鍵となつて構成されているのである。その出来事とは言うまでもなくエジプトよりの救出であ

モーセ五書の構成



そして同様に、出エジプト後の荒野の生活にも同じ神の御業が告白されて連ねられており、さらには、旧約聖書のこれにつづく全体に対して出エジプト事件の発言力がおよんでいると知ることができる。上述のように創世記一―三章の記事（創造論）は出エジプト事件（和解論）とは区別された領域をもつが両者は単独で存在せず不可分離の関係をもっているのである。

る。実に五書の歴史は創造よりカナンへの道程迄が、何らの変哲もなく流れている歴史ではなく、エジプト脱出という今しもモーセが経験した救済の重大事件をその核としているのである。

同時にこの事は五書が記録され成立してゆく過程にも大きな光を投げかけるものであると言えよう。すなわち、著者の手には、それまでの民族の歴史や父祖の伝承、あるいはその民族がヤールエを信ずる信仰観より生みだした創造の物語などの諸資料が正しく伝承されて来てあつたはずである。したがって、その著者は今しも救済の重大事件を体験して来たものとして、彼自身の存在のあり方まで規定するその出来事の意味を何につけても表現せざるを得なくなつたであろう。このことは彼が同民族の父祖の歴史を書く時にも、又、天地の創造を記述する時にも、それらの記述の背後に切り離すことのないものとして横たわつていたであろう。換言すれば、出エジプトの救済の光の投影を受けないで全く独立的に記されたものは何一つないのである。父祖の歴史も創造の記事も出エジプトの光より見直されて記されているのである。

③ C・ヴェスターマンはこれらの消息を簡明に左のように図示する。

C イエス・キリストの五書理解

出エジプトの救済の御業を中核とするモーセの五書をイエスが「モーセはわたしについて書いたのである」（ヨハネ五の46）とヨハネ福音書の著者は記している。ヨハネ福音書の基底にはイエス・キリストにおいて救済史的に再解釈されたモーセ・モチーフがあると言われているが、T・F・グラッソンは「第四福音書におけるモーセ」という書物の中で旧約救済史における神の使者としてのモーセとイスラエルの関係は新約救済史における受肉のロゴスとしてのイエスと教会の関係に見直されていることを指摘している。④ 言うまでもなく先掲の聖句の「わたしについて書いた」とはモーセの五書が直接的には指示されているであろうから、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記という律法書のもつまとまつた一つの救済史の原型的典型を指していると考えることができる。そして実はそれがイエスに「ついて」書かれたのであるからここではあの五書のもつ旧約救済史に、イエスがモーセを媒介として係つたのであると理解したのである。それゆえ、出エジプトはやがて世界に展開されてゆく救済史の核をなす罪からの解放の原型であり、荒野のマナや水はそうした被解放者達の生命を支える新約の教会における礼典の原型、幕屋は礼拝および被礼拝者の原型となつてヨハネの福音書を一貫しているのである。したがってモーセは旧約救済史においてさえ救済史の立役者の単なる媒介になつたに

過ぎず、彼自身の意義の成就者であるイエスをはるかに指示したのである。²² とりわけ本稿が関心をおく著者モーセに係る創造の記事もイエスの光によって再把握されているのである(ヨハネの1-5参照)。

これらのことから知られることは救済の歴史を内容とする聖書正典の構造そのものが始めから、キリスト論的乃至は和論的な見地から一つ一つの出来事を見ていると言うことである。そしてこの聖書こそが教義学の根源的基本的資料なのである。

むすび

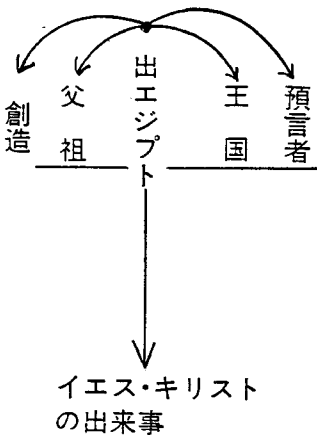
「創造論」と「和解論」の位置づけに対して、与えられたテキストから、その中にそれらを妥当にしてゆく何らかの光がないものかと考えてみた。そして教会教父や宗教改革者たちの正統的信仰に立つものたちはキリスト論的、和解論的なものから光から創世記1-3章を解釈しているのを見て来たのであるが、それらは決して彼らの独自の見解ではなく聖書そのものが本来的に内蔵しているあり方であることを見て来た。そのことが直接的に決定的な理由となつて、論者は両者を機械的に位置づけしようと断定するのではない。あくまでも一つの示唆としての試みである。確かに教義学各論において「キリスト論」「和解論」は他に対して優位な位置をもつことがこの研究からも明

らかにされた。だがそのことは「創造論」が劣位にあるとか固有な意義をもたないと言うのではない。両者の関係を問うなら、「創造論」は「和解論」の基礎であり、「和解論」は聖書のメッセージとして、より根源的なものであると言えよう。熊野義孝氏が「創造論はキリスト論に認識根拠を提供し、キリスト論は創造論の存在根拠を明瞭にするとも考えられる。両者はその叙述について順序をふむにしても、論理において先後をもたない。もとより福音信仰とその自省とが何よりも先に、キリストの啓示を出発点とすることは言うまでもない事実であるからして、創造論がキリスト論的根拠に立つべきことを強調するのは、至極当然のことである」という時、まさに両者の位置づけに対して正しい一つの方向を与えていると言うことが出来よう。

注

- ① 例えば玉林・山中・城崎・小林「創世記」共同研究
- ② 同前、19ページ
- ③ 熊野義孝「教義学」第二巻 12ページ
- ④ 渡辺善太「全集」第六卷ノ解釈学ノ参照
- ⑤ R.G. Collingwood, The Idea of History pp. 282-302. cf.
- ⑥ K. Barth: Dogmatik, I, S. 108.
- ⑦ 玉林・山中・城崎・小林、同前、14ページ参照

- ⑧ カルヴァン「キリスト教綱要」I、218ページ、渡辺訳
- ⑨、⑩ カルヴァン同前219-221ページ
- ⑪ T.F. トーランス「カルヴァンの人間論」36-37ページ、泉田訳
- ⑫ T.F. トーランス同上、38ページ
- ⑬ くわして解釈に関するE.W. Hengstenberg "Christology of the Old Testament." pp. 13-24. cf.
- ⑭ F. テウイスマン、A. ステイプス、E. ケヴァン「聖書注解」、16ページ、日本訳
- ⑮ 渡辺善太「全集」第四卷、462-463ページ
- ⑯ 同上 第六卷 1058ページ
- ⑰ 同上 1060-1061ページ
- ⑱ K. Barth "Christ and Adam. Man and Humanity in Romans 5." Tr'd by T.A. Smail. p. 6.
- ⑳ C. ウェスターマン「創造」34ページ、西山訳
- ㉑ C. Westermann "Handbook to the Old Testament." Tr'd by R.H. Boyd. p. 18. cf.
- ㉒ 図を参照すれば次のようになる



- ㉓ T.F. Glasson, "Moses in the Fourth Gospel." pp. 20-26.
 - ㉔ 特に礼典に関する詳説は O. Cullmann "Early Christian Worship." 参照
 - ㉕ 拙著「ヨハネのキリスト証言」「宣教師」第9号、ページ
 - ㉖ 熊野義孝、同前10-11ページ
- (東京聖書学院教授)